

## 基督教に於ける神の内在觀

日 野 眞 澄

基督教の神觀は超越的(Transcendent)であるとは多くの人々が懷いて居る概觀であるやうに思ふ。而かも基督教内の思想家中には神を内在的(Immanent)に考ふる人が極めて多い。特に第十九世紀の初より斯く考ふる人の増加した事は争ふべからざる事實である。亦第十九世紀以前にありても神を内在的に考へたる基督教神學者の決して珍しくなかつた事も事實である。予が今論ぜんとする所は無論基督教内に於ては神を超越的に考へぬと云ふのではない。思想家ならざる普通一般の基督教徒は概して神を超越的に考へて居るであらう。されど今日は基督教界内の學者は多く神を内在的に考ふるやうになつて來たのみならず、過去に於ても神を内在的に考ふる事は可なりあつた事であると云ふのである。基督教史上に於て如何なる場合に於て又如何なる人によりて神は内在的に思惟せられしや之を考へて見たいと思ふ。

前以て斷つて置かねばならぬ事は予は此文に於ては内在(Immanence)と遍在(Omn-

presence)との區別を爲さず之を同一視して論ずる事である。予は思想上此二觀念には區別ある事を知らないのではない。即ち遍在といへば神の統治權の偉大なるを高調せんが爲めに用ゐた語で神の支配は天地間到处無限なしと觀たのである。然るに内在なる語は主として世界の尊嚴を誇張せんが爲めに用ゐたので世界其物は輕んずべからざる價值を有すと云ふ思想を言明せんが爲めに用ゐられたと云つて宜しからう。要するに遍在觀は神と世界との間に存する差別觀に基きて立論し内在觀は兩者の間に存する平等相に基きて立論したのである。遍在は神を中心とした世界觀に屬する語で、内在觀は世界を中心とし物界と有限的經驗とを重んじたるが爲めに生じた世界觀である。遍在と内在との用法には此の如き歴史的區別があるけれども、兩者共に神を以て天地間に普ねく存在すと云ふに於ては同一である。故に予は此二個の語を同一の意義に用ゐて論ずるのである。敢て兩者の區別を無視した譯ではないが斯る簡短なる論文に於ては如上の區別を爲して論ずる程の必要もないと思ふ故便宜上同一視したまでである。

神を超越的に概念する事と内在的に概念する事と孰れが易いかと云へば普通の人には超越的に考ふる事は樂であると思ふ。何となれば何人も神と云へば人と異

なれる偉大靈妙の存在者であると思ふであらう。故に神は人と大に異なれりとの考が先づ心中に浮ぶに相違ない。普通の場合には此差別を高調する見地は神を超越的に考へしむるのに助けとなる。之に反して神の内在觀は神と人とを平等相より觀て兩者を接近せしめたものである。神と人とを同一視する爲め普通以上の人を捕へて直ちに之を神なりと看做す習慣は幼稚なる世俗の宗教には有り勝ちの事なれど、神を無限絶對なりと觀て有限的世界と罪深しと判ぜられたる人間とより區別せる神を以て人に類すと看做す事は普通の場合には随分骨の折れる考へ方である。故に普通の人々に取りては神を内在的に考ふる事は之を超越的に考ふるよりも餘程困難であると思ふ。然らば内在觀は如何なる場合に生し易いかと云ふと、予は神の内在觀の構成せらるゝに先ち少なくとも先行條件は二個あると思ふ。

一、唯一神論の確立、宗教史の研究十分ならざる頃は人類は最初唯一の眞神を信じて居たが、罪を犯して其理性暗み、良心の判斷當を得ず、遂に墮落せる結果多神教に陥つたと思ふた人も多かつたが、斯の如き思は今日識者の間に之を懷く者はない。蓋し野蠻人は概して多神教や偶像教若くは之よりも一層劣等の宗教を奉じて居る。蓋し唯一神教は宇宙の統一と云ふ考がなくては成立せぬ。宇宙の統一と云ふ事は自

己の經驗を統一し得ざる頃には成立し難いのである。故に唯一神教は餘程文化の發達した社會にのみ成立し得ると思ふ。之を猶太史に稽ふるに猶太には最初物札崇拜やら多神教などが行はれた。即ち國神ヤヱの外に産土神パールやモロクヤベルやネボ等の神々が崇拜された。殊にパール神はヤヱ神と相並んで崇拜せられた事が極めて夥しかつたのである。而して唯一神教を國是として斷行するに至つたのはヨシャ王の第十八年即ち紀元前六百二十三年頃である。夫までは猶太の宗教の進化は漸次唯一神教の方向に向つて進んで來た事は云ふまでもないが、未だ明かに唯一神教とはならなかつたのである。其後と雖ども民間に於ては嚴然たる唯一神教は時々危險に瀕した程であつた。されど國家の大方針としては兎に角に唯一神教は動かすべからざる者となつたのである。唯一神教が確立するに至つて始めて一神が天地全部を支配すべしとの信念が生ずるやうになる。神が天地全部を殘る限なく支配すべしとの信念は即ち遍在 (Omni-presence) である。之を近世の思想に翻譯して觀れば内在 (Immanence) となる端緒であると云はねばならぬ。何と云つても神は澤山存在して居つては天地の統治は四分五裂して恰も英雄が割據して居るが如き有様であつて、到底神の遍在は實たり得べしと考へられぬ。最初吾人の

經驗は部分的であつて統一的ではない。隨て天地も之を部分的に考へて渾一的統體としては考ふることが容易でない。故に唯一神教が確立せざれば神の内在觀は成立し得ぬと思ふ。猶大にては紀元前六百二十三年頃始めて唯一神教が國家の宗教の基礎と成るべき主義が確定し、之を實地に應用して遂に斷然禮拜所を首都エルサレムの神殿一ヶ處に限定したが、其頃直ちに神によりて天地全體が統御せらるべしとの雄大なる考が現はれなかつた。何となれば天地間には神のみの勢力が現はるゝのみならず、天災地變あり、罪惡の横行するあり、殊に神の保護を受けて居る筈であると思はるゝ猶太國其者が外敵の侵害を受けて國家滅亡の大災厄に遭ふた事を始めとし、多くの不可解の事柄が瀕々として生じたからである。故に天災地變のみならず、地球上に國家を組織せる諸強國も亦社會を惱ませる罪惡等も悉く神の攝理によりて生ずべしとの信念生ずるに非ずんば、縱ひ唯一神教は確定しても直ちに神の遍在を信ずる事が難く、天地間に尙ほ惡魔の如き神に逆ふ者があつて神の統治の達せざる所があると考へられ易い。天地間の凡ての勢力が神の支配の下にあるべしとの信念は唯一神教が確立しても多少の進歩を爲した後でなければ生じ得ない。猶太に於ても唯一神教は紀元前六百二十三年頃國是として定まつたけれども、神の

遍在の判然と宣傳せらるゝに至つたのは巴比倫時代の末期即ち紀元前五百三十九年頃である。此頃に神が天地を創造したと云ふ思想が著しく現はれた。神が天地を創造したと云ふは之を創造した程の神は天地の各部を熟知すると同時に能く之を構成する事も之を破壊することも意の如く爲し得べしとの考を持つて居るのである。故に神が天地を創造したと看做すは神が天地を全く統轄すとの信念を強く且つ子供らしく詩的想像を用ゐて云ひ現はしたのである。即ち神の統治は力的に考へたのであるが、神の遍在は同一の思想を空間的に翻譯したのである。而して神天地を創造せしとの想像は更に同一の思想を詩的空想に改めたのであると思ふ。斯の如くして神の全能と云ふ信念が教育十分ならざる普通の田夫野人にも亦發育不完全の兒童にも面白く神を讚美せしむる事となつたのである。神天地を創造したと云ふ考は巴比倫時代の末期に生存したる無名の預言者通稱第二以賽亞に著しく出でゝ居る。以賽亞四十五章五節以下にある左の文を參照せられよ。

我はエホバなり、我の外に神なし。一人もなし。汝我を識らずと雖ども我汝を固ふせん。而して日の出づる處より西の方まで人々我の外に神なしと知るべし我はエホバなり、他に一人もなし。我は光を造り又暗黒を創造す。我は平和を造り亦禍害を創造す。我はエホバなり、我凡て是等の事を爲すなり。

此文は舊約古典學者の一致するが如く巴比倫時代の末期に屬する文であるが、神を獨一なりと認めたのみならず、暗黒や禍害をも神の創造統轄攝理する所であると看做したことは明である。是れ則ち神を以て天地間に於て悦ばしく見え又樂しく思はるゝ物のみの責任者であるとしたのでなく、悲しく思はるゝ事件や不幸なる出來事等に對しても神を其責任者であると判斷したので神の統治權の絕對的無條件なるを言明したのである。此絕對的統治と云ふ思想を空間的に翻譯した場合には神の遍在となる。神の遍在と云ふ考は第二以賽亞より餘程後代の作たる詩篇百三十九に最も著しく現はれて居る。(第百三十九詩篇著作の年代は之を確定し難いけれどもマッカビ時代<sup>一</sup>の作であらうと思ふ。即ち紀元前第二世紀頃の作であらうと思ふ)

「エホバよ汝は我を探り我を知り給へり。汝は我が坐るをも立つをも知り、又遠くより我が念をわきまへ給ふ。汝は我歩むをも我が臥すをも探り出だし、我が諸々の途を悉く知り給へり。そは我舌に一言ありとも視よエホバよ汝悉く知り給ふ。汝は前より後より我をかこみ、我が上に其手を置き給へり。斯る知識はいとくすしくして我にすぐ。また高くして及ぶこと能はず。我何處にゆきて汝の聖靈を離れんや。我何處に往きて汝の前をのがれんや。我天に昇るとも汝彼處にいまし、我が榻を陰府に設るとも、視よ汝彼處に

在す。我あけぼのゝ翼をかりて海のはてに住むとも、彼處にて尙ほ汝の御手我を導き汝の右の御手我を保ち給はん。暗きは必ず我をおほひ、我を圍める光は夜とならんと我云ふとも、汝の御前には暗きものをかくすことなく、夜も晝の如くに輝けり汝には暗きも光りもあることなし。汝は我がはらわたを造り又我が母の胎に我を組み成し給へり。我汝に感謝す。我は畏るべく奇しく造られたり。汝の事跡は悉く奇し。我が靈魂はいとつばらに之を知れり。我隠れたる所にて造られ、地の底所にて妙につゞり合はされし時、我骨汝にかくるゝことなかりき。我が體未だ全からざるに汝の目は早くより之を見、日々かたちつくられし我が百體の一だにあらざりし時に悉く汝の冊に誌されたり。神よ汝の諸々の聖念は我に尊きこと幾何ばかりぞや。其みおもひの總計はいかに多きかな。我之を算へんとすれども、其数は砂よりも多し我眼さむる時も尙ほ汝と偕に居る云々

此文は神の天地間に存在せぬ處は全くないとの思想を明示して居る。勿論是は哲學的に考へたのではない。實に宗教的要求より推して神の統治の全地に遍きを讃美したのである。乃ち大體の心的態度は宗教的讃美であれど神學的遍在又は哲學的内在の觀念に最も縁近きものである。故に猶太の宗教思想發達の順序より云へば唯一神教確立してより百年程を経過して神が天地の全部を創造せりとの信念に進み、更に三百年程を経て神の遍在と云ふ信念に到達した者であると云へる。故に基督時代に於て神が天地萬物に内在すと云ふ思想は難なく人々に信ぜらるべ

き類の豫備條件を具備して居つたのであるが、一般の民衆は神の内在と云ふ考を懷くよりも神を超越的に概念するの習慣を有して居つた。基督時代に於ては普通の民衆は神は最早其時代に在さず唯數百年の昔に生存せる預言者時代にのみ活動したと考へて居つた。又神を空間的に考へた場合には諸天の中にて最も遠き彼方に存する第七の天に鎮座すと考へて居つたやうである。希伯來語にては天なる語を何時も複數にして用ゐて居る。而して此希伯來語を翻譯したる希臘の新約書に於ては之を亦複數とした。當時の人々が神の所在地を天にあるとなしたのみならず、諸天中の最も高き天となした事も之によりて明かに知る事が出来る。固より思想發達の順序より云へば基督時代に於ては神の遍在を説く事は何でもなき容易の事であつた筈であれど、理論上容易なる事を一般の人々が信じなかつたのは確かに宗教上の信念は理論とは違ひ、一般に認めらるゝには一方ならぬ困難ある事を證するのである。基督時代の民衆は申すに及ばず學者までも神を超越的に考へて居つたが基督は衆に秀でた人であつて流石に神を内在的に考へたと思はるる痕迹が見ゆるのである。基督は己に反對したるバリサイ人而かも偽善者なりと自ら叱咤したるバリサイ人に向て神の國はバリサイ人の中にすら存在すると教へた。路加傳十

## 七章二十節二十一節には左の句がある。

「神の國は何時來るか」とパリサイの人に問はれければイエス答へて曰けるは、神の國は顯はれて來るものに非ず此に視よ彼に視よと人の言ふべき者にも非ず夫れ神の國は爾曹の表に在り

以て神の内在觀を構成するに當りて必要なる先行條件として先づ神の獨一なるを確立せしむべしとの意義が判明であると思ふ。是は猶太の宗教史上より論じたのであるが、哲學問題として考へて見ても同じであると思ふ。内在觀は一元論には伴ひ易きも二元論や多元論には生じ難いと思ふ。古來内在觀を主張したものは汎神論を以て最も適切の者であると看做さねばなるまい。而して汎神論は一元論である事は云ふまでもない。

二、神が直接個人の經驗内に入るべしとの確信 が起らなければ神の内在觀が宗教的現象には生じないと思ふ。唯一神論が確立し神と人との間に存する平等相が高調せらるゝに隨ひ神の内在觀が餘程說かれ易くはなるが、是のみにては内在觀が成立せぬ。何となれば宗教は客觀的に事物を解釋したのみでは生起し得ない。是が即ち宗教が學問と異なる所以である。宗教現象は客觀的に解釋した者を更に主

觀的に自己の情感に訴へて痛切に我が事として染染みと味ふ様にならねば生起せぬのである。故に縦ひ神が天地自然の中に遍在すると思ふても、若し其神が我が心の衷に入り來りて我が情意を動かすと思はずば、神の内在觀は極めて冷靜なる者で味氣なき概念として存するのであるけれども未だ是のみにては熱烈なる信仰とはならぬ。故に神の内在觀が宗教上の信仰として有效なる爲めには必ずや神が個人の經驗内に入り來る者であるとの信念が必要である。之に反して若し神と個人と直接交渉し得ずして兩者間に何等かの媒介を要すと云ふ事になれば、内在觀が成立せなくなる。例令神を概念するに當りて之を帝王の如くに想像し、制度律例と云ふが如き手續や媒介を経ずしては神の恩寵が人に降らぬと思ふ場合には、羅馬加特力教會にては然り、神の内在觀は成立し得ざるやうになるのである。故に概して云へば個人を輕んじて祭司や僧侶の祈禱を過大に尊重し、誠律主義を誇張する宗教には超越觀が勢を得て内在觀が跡を收むる様になると云へる。宗教は藝術や道德など、同じく價值や目的を重んずる者であるから、個人の懷く主觀的の情感を無視しては到底十分に發達し得ぬのである。古來の大宗敎家を通觀するに何れも皆な自ら直接神と交渉した者であると信じ、神の召命を受けたと云ふ信念がある。神若し個人

の心中に何等の感動をも與へずとせば、縱ひ神は天地萬物の内に在すとするも、我心には在さぬ神である。隨て神の在す天地は我が經驗と沒交渉の天地であつて、我には何等の味氣なき天地、有れども無きに均しき天地であると云はねばならぬ。斯くなれば神の内在せる天地と神の交渉を受けぬ我が經驗と別々の事實が二列に存在するのであつてこれは結局二元論に了るのである。二元論に内在觀の生じ難きは既に云つた通りである。吾人は神は天地にも内在し、我にも内在すべしと斷じて始めて天地全部を我經驗にて翻譯して之を味ふ事が可能となるのである。故に大宗教家は皆な神に咫尺して直接其召命を蒙りたりとの信仰を懷いて居る。別語以て之を云へば「我神」と云ひ得るまでに宗教的經驗を積まずば、我心内を支配する神の見地より判じて天地に内住する神を以て我心内の神と同一なりと判斷する見識に達し得ない。隨て斯る場合には神の内在觀は成立せぬと思ふ。

唯一神教の確立と神が直接個人の經驗内に入るべしとの確信とは神の内在觀を構成するに當りて必要なる先行條件であるが、是のみにては基督教の内在觀は成立せぬ。何となれば基督教の懷ける神の觀念は一種特別であつて此の神觀は普通の人々によりて理解せらるゝ所に據れば内在觀に導き易き要素を有して居らぬやう

に見ゆるからである。基督教に最も著しき神観は何であるかと云へば神を道徳的統治者と看做す事である。基督教は倫理的宗教である。故に如何なる場合に於ても神の道徳的存在者である事を忘れる譯に行かぬ。又神が人類の主宰である事を常に記憶して居る。故に基督教の神の内在觀を構成せんが爲めには既に論じたる二點に加へて更に尙ほ二個の先行條件が必要であると思ふ。

三、道德律を他律的 (Heteronomous) に解釋する事を棄て、之を自律的 (Autonomous) に解釋する事。野蠻人や小兒や、教育不十分なる人は道德律を他律的に解して之を自律的に解する事をせぬのが普通である。即ち道德は神より賜はりたる誠律であるとか、祖先の遺訓であるとか云ひて、外より我に課したる規則の如くに考へる習慣がある。道德律は其上命令として吾々に臨む故に我が我に命ずと云ふよりも我以外の者が我に命ずるのであると思ふ事が考へ易いのである。然るに道德を自律的に考ふる事は稍年長けねば生ぜぬものである。故に子供には神を内在的に考ふる事が餘程困難である。吾人は良心の權威を痛切に感ずるに至らずば、到度神を内在的に判斷する事が出来ぬと思ふ。猶太の宗教史上より云へば世に名高き彼の十誡の如きは神がシナイ山に於てモーセに下賜せる訓誡である。猶太人は決して之を以

てモーセや或は預言者等の心に悟られた信念であるとは思はなかつた。道德を自律的に考ふるに至つたのは預言者エレミヤであつて、紀元前六百年頃であると思ふ。エレミヤ書三十一章三十一節以下にある左の文に照して之を觀れば明である。

エホバ云ひ給ふ、見よ我イスラエルの家とユダの家とに新しき契約を立つる日來らん。此契約は我が彼等の先祖の手を取りて埃及の地より之を導き出せし日に立てし所の如きに非ず。我彼等を娶りたれども彼等はその我契約を破れりとエホバ云ひ給ふ。然れど彼の日の後に我がイスラエルの家に立てん所の契約は此なり。即ち我我が律法を彼等の衷に置き其心の上に録さん。我は彼等の神となり彼等は我民となるべしとエホバ云ひ給ふ。

基督教にては道德律を自律的に解釋する見解は後ち聖靈論となり萬事を聖靈の告げ示す所に準じて行ふ事は即ち天地の神に事ふる所以であると解さるゝに至つた。此論を最も大膽に主張したのはマルテン、ルーター (Martin Luther) である。隨て宗教改革以後は大に個人の價值を重んじ其權利を尊重するに至つた。

基督教が若しも倫理的宗教でなくして單に人の幸福や快樂を主として薦むる宗教であるとしたならば、即ち利や美を第一位に据えて居いて利や美の目安より人生を論ぜんとする宗教であるとしたならば、第一、第二の先行條件の備はると同時に神の内在觀は確立するであらうが、倫理を基としたる宗教に於ては如何にしても神人

間の差別を高調する傾向を産み易い故に、内在觀は自ら生じ難い。故に、道德律を自律的に觀る必要がある。而して進歩する國民の或る時代には斯る時が來るであらう。個人に於ても同様で少年期を經過して後に起る現象である。

四、政治に於て民主思想發達して自治精神の勃興する事、既に神を以て道德的統治者と看做す以上は治者たる神と被治者たる人間との區別を立てねばならぬ。然るに普通の人々の考にては自分で自分を治むると云ふ自治的思想は少なくして統治者は我の外にありて我に命令するのであると思ひ易い。斯る場合にては神を内在的には考へ難いのである。自分で自分を治むと云ふ思想は民主思想の發達した場合には生じ易い考である。斯の如き自治的精神は猶太史若くは基督教の歴史に於て何時頃生じたかと云ふに元來猶太民族は概して民主的であつたにも拘はらず自治政治は遂に基督の前には成立しなかつた。是は基督教徒が猶太の有司より迫害せられたる結果、宗教を國家より分離せしめて國教制度より蟬脱して有志者の自由團體たる基督教會を建設した時に始めて生起したと云へる。是は紀元三十五六年頃には成立したのでエルサレム會議(紀元四十五七年頃)に於て基督教が世界主義の宗教なる事を確定した時に愈々鮮かに示さるゝに至つたのである。然れども國家の指

導や管理を離れて自ら自分共の團體教會を治めて行かんとする勇氣は中途にして隨分挫けた場合も少なくなかつたが第十六世紀の Anabaptists の爭論や Congregationalism 日本の組合教會の類の主張したる自治主義によりて徹底したる組織が成立するに至つた。自分で自分を治むると云ふ考が勃興して此政治が即ち神の聖旨によるものであると斷じ得るに至つて道德的統治者たる神の内在觀が成立し得るのであると思ふ。

以上四個の先行條件が基督教の神の内在觀を構成するに必要であるとすれば是は幼稚なる人々には懷き難き思想であると云はねばならぬ。熟ら基督教の歴史を稽ふるに以上の四個の條件は何時頃に存したりやと云ふに、是は既に論じたるが如く第一世紀に於て既に存したと云へる。されど此先行條件が具備したからと云つて、直ちに基督教社會にては一般に神を内在的に概念したりやと云ふに必ずしも然らず。超越的に考へた例が隨分多いのである。以上の如き四條件は初代の基督教に備はつて居つたとは云へ、此四條件よりも一層有力なる他の勢力が存したらんには、神の内在觀は成立し得ぬ譯である。予は是より如何なる時代と如何なる場合とに於て神の内在觀が基督教史上に著しかつたかを論じて見やうと思ふ。先づ時代

より論ずる事とする。

神の内在觀は新約聖書にて云へばパウロとヨハネとは之を説いて居る。殊にヨハネには内在觀は著しく見ゆる。彼は十章三十節に於てイエスをして「我と父神を指す」とは一なり」と斷言せしめ、又十四章六節以下に「イエス彼に曰けるは我は途なり、眞なり、生命なり。人若し我に由らざれば父の所に往くこと能はず。若し爾曹我を識らば我父をも識るべし。今より爾曹彼を識るなり、已に爾曹彼を見たり。ピリポ彼に曰けるは主よ我儕に父を示し給へ然は足れり。イエス彼に曰けるはピリポ我かく久しく爾曹と偕に在りしに我を識らざるか、我を見し者は父を見しなり。何ぞ父を我儕に示せと云ふや。我父に居り父の我に在ることを信ぜざるか云々」と云ふが如きは神の内在觀を遺憾なく發揮したる者と云つて差支なからう。勿論斯の如き句は哲學的見解を土臺として演繹されたものではない。約翰傳は神がイエスに在つたと云ふのみならず亦イエスが彼の十二弟子や普通の信徒の中にも在ることを認めて居る。例へば十五章には「我は眞の葡萄樹我父は農夫なり爾曹我に居れ、さば我亦爾曹に居らん。枝若し葡萄樹に連らざれば自ら實を結ぶこと能はず爾曹も我に連らざれば亦此の如くならん」と云へるが如き、明かにイエスの靈と弟子の衷

に活躍する靈とが同じ類ひの者であると假定して始めて意義が明になると想はれる。新約聖書以後になりては神の内観は漸く哲學的意義にて用ゐらるゝやうになつた。これは概して希臘神學に於て左様である。希臘神學の中心はアレキサンドリアのクレメントとオリゲネースとであるが此二人は神を主として道理として觀て居る。道理は何人にも東西古今の別なく普ねく行き亘るもの即ち決して一方處や一時代に局限せらるべきものではないと思はれる。主理論者は何時も理性の遍通自在なる事を主張する。希臘神學者等は主として神を理性と看做し、神のロゴス (λογος) を高調する。隨て神の遍通自在にして萬物萬事に融通するを説く。故に殉教者ユステュスの如きは同一の理性が活動して居つたと云ふ理由の下に基督以前のソークラテスやヘラクライトスやプラトーンなどまでも之を基督教徒であると論じた程であつた。即ち彼等の考に據れば神は理である。基督教と眞理とは同一である。故に彼等は基督教を歴史の一產物として觀ることを爲さぬ。故に神は何時にても何處にても普遍的に自然界と人心とに存在して居ると觀て居る。此考はクレメントとオリゲネースとには著しく現はれ居る。

然るに拉典神學に至れば概して神は超越的に考へられて居ると云へる。是は拉

典神學者が神と人とを觀るに希臘神學者と異なる見地より爲したからである。

拉典人は神を理とか萬物の調和たる美とか云ふ視點より神を考へずして之を主として意志として考へた。理は普遍を高調し、美は調和を主張し、事物の平等相に着目し易いが、意志は概して差別相を高調し、我の意志と他人の意志との別を知らしめ、易い。故に、意志を高調すれば神の意志と人の意志との間に存する差別を著しく感ぜしむる事になる。拉典神學は意志を土臺として世界觀と人生觀とを築き上げた結果著しく。

(A) 罪惡觀と (B) 救濟觀とに於て神を超越的に考へるやうになつた。

(A) 罪惡觀に於ては神は清淨無垢なるに人は神意に叛きて罪惡を犯し隨て其性情劣惡となりたれば人は神に近くべからざるものであると判斷せられた。原罪論と云ふは此考を高調したのである。

(B) 救濟觀に於て拉典神學者輩は教會の執行する聖奠 (Sacraments) とて洗禮、晚餐禮、堅信禮、就職式、教刑、婚禮、末期の塗油の七典を指すを經由せざれば神の恩寵は人に及ばないと論じ、教會を以て天地間に存する唯一の救濟專賣局の如くに考へ、教會の手續を経ずしては何人も神に近くべからずと觀た。故に人と神との關係は猶ほ平民

と帝王との關係の如く兩者間に直接交渉は存し得ずと看做した。故に神は此世界に直接關係する事はない。必ず教會の媒介を経て間接に事を爲すのであると看做された。神は死んだのではないが、神は此世界より留守して缺席して居る如き有様であると考へられたのであつた。

斯の如き見解は拉典神學には極めて夥しい。殊に名目論(Nominalism)の行はるゝに至りてより神を以て萬事萬物に遍通する存在者であると云ふ觀念は跡を收めて神を以て個物や個人のやうに考へるやうになつた。概念を虚であると判ずる名目論より推せば神を以て萬物に共通なる者としては考へられなくなるは止むを得ぬ。

遍通自在の神と云ふが如きは恰も幽靈の如く空想としか思はれなくなつたのである。故に名目論者の神觀は希臘神學者の理性論とは全く正反對者となり。神は個體若くは個人としてのみ實有なりと解せらるゝに至つた。

然るに第十九世紀に至りて一方に於てスピノサ研究が獎勵せられ千有餘年の久しきに亙りて行はれたる人間墮落説を土臺として築かれたる意志の決定論(determinism)は漸次勢力を失ひて自由意志論勢を示すやうになり、進化論益重んぜらるゝに至りて生物間の差別痛く滅殺せらるゝやうになりたる爲め、基督教の思想家も神を

超越的に考ふる習慣特に第十七第十八世紀に行はれた超越神論 (Deism) を棄て、神の内在觀を高調するやうになり、今日にては神を超越的に考ふる神學者は極めて稀であると斷言する事が出来る。此點に就て一々の神學者に就て論ずる事は今閑暇なくして爲し得ぬ故、他日に譲らねばならぬ。

次に如何なる場合に神の内在觀が基督教會に行はれたかと云ふに是は主として左の三の場合に著しいと思ふ。

一、神との交際 (Communion with God) と云ふ思想の著しい時である。是は新約書の語を假用せば *Koinwneia* である。パウロは使徒行傳十七章廿八節に「それ我儕は彼(神)に頼りて生き、亦動き、亦存する事を得るなり」と云つたが、基督教は神は人類の父であると判じたので、人は何時にても神と交はれる者であると看做して居る。此考はイエスとパウロとヨハネとに著しいが何人にも能く存してゐる。人をして教會や祭司の媒介なくしては神に交はれぬと感ぜしむるやうになしたのは拉典教會の神觀と制度論との罪に歸せねばならぬ。而して神と直接交はると云ふ考は特に

(A) 晚餐式と (B) 祈禱とに著しく現はれて居る。

(A) 晚餐は元來は基督と共に食を爲すと云ふ考なれど普通の基督教徒は基督の靈

と神の靈とを同一視するが故に基督に交はると云ふ事と神に交はると云ふ事とは同一の意義を有して居ると云つても差支はない。晩餐は一名之を Communion と云ひて之を行ふ時特に基督の靈と親み得、己との信仰より之を守る次第である。古來基督教會に於て晩餐式は幾何許り尊重せらるゝかは昔時は之を神秘 (mysterion) の一に數へ、希臘神學者等は之を不朽不死の生命を與ふべき藥であると云つた事あるに徴しても明である。

(B) 祈禱 基督教徒の考にては瞑想と祈禱とは大に趣を異にして居る。瞑想ならば自分一人にて獨想するのであるが祈禱は個人が神と交はる状態を指すのである。故に祈禱を爲す者は恰も生ける人と談話を爲すが如く神と談話するのである。

晩餐式と祈禱とは如何にしても神の内在觀を假定せずしては生起し得ぬ心理状態であると云はねばならぬ。次に神の内在觀を假定したものは

二、神秘主義である。神秘主義は基督教の初代より存在した。パウロは最も著しき神秘論者であり、拉典神學の父たるマウグステヌスも著しく新プラトニ的傾向を帶びたる神秘主義者であり、ルターも可なり神秘主義の濃厚なる人であつた。神秘主義は其反對する點より云へば間接なる煩雜なる論理作用と制度を金城鐵壁

として立てる祭司主義とに反對して居るので積極的に其主張を言明すれば無限の價值たる神を直觀自得する事である。自己が直接に神と交はるのが神秘主義の特色である。故に神秘主義は個人の直接經驗を最も重んじ、個人の確信を尊び我が經驗せる所より推して天地を解釋せんとするより起るのである。此神秘主義は神の内在を假定せずしては到底成立し得ぬ主義である。此神秘主義は個人主義である。故に概して團體を組織した事は少ないが彼の英國と米國とに唱へたクレカル(Quakers)派又は友人派(Friend)は團體を組織したる神秘主義であつて内的光明論(Doctrine of Innerlight)を高調して立つて居る。獨逸の Herzhuter 等も亦大體同じ傾向を帯びて居る。次に神の内在觀を高調する基督教會内の思想は

三、聖靈論に最も著しく現はれ居る。聖靈論は人心内に住める神の靈を假定して生じた議論である。天地の主宰と云ふ時は神は尊嚴にして卑しき人間の交はり得ざるが如く感ずるも基督教會にては聖靈と云へば人心に住める神と云ふ意である。此靈は絶對無限として觀られたる純有(Pure Being)に非ず、愛の充てる母の如き神なりと看做されて居る。殊に聖靈が個人の良心と理性の裏に住むとの考はルターには著しかつたので、彼は之を基礎として羅馬加特力教會に衝つたのであつた。

基督教會では聖靈論があればこそ個人の信念や主張が重んぜられ奉教の自由が一般に承認せらるゝに至つたのである。クロムウエルの徒が民權自由論を鼓吹せるも畢竟するに聖靈の感化を受けて立ちて居ると確信したからである。

以上論ぜる所に據りて之を觀れば基督教に神の内在觀を立つべき基礎が十分であることは明である。唯拉典風の意志的的人生觀と形式的間接政治觀と罪惡觀とが之を遮つたのである。されど基督教は古より存せる平等觀と統一觀と神秘論とは神の内在觀を立せしめねば飽くことを知らぬであらう。